



「バイバイ、あとおねがい」

といて、鶴巻さんたち、亜紀を残してさっさと帰ってしまった。まだ、バケツの水をすてに行かなきゃならないのに。

亜紀は、バケツから水がこぼれないようにそろそろと廊下を歩いた。

朋ちゃんがいたら、二人で運んだのに。

五年生のクラス替えて、別のクラスになってしまった。

亜紀は一組。朋ちゃんは二組。いつも、朋ちゃんと行動していた亜紀。すぐにだれかほかの人と仲良くするなんてできなくて、亜紀は、ひとりではつんといることが多くなつたのだ。

チャボンとバケツから水がはねて、亜紀の足にかかった。そのとき、ふいに、バケツが軽くなった。

「いっしょにもってあげるね」

びっくりして見ると、反対側からユウレイがバケツをもつてくれた。

ユウレイ。おなじクラスになった結城レイのこと。

結城レイはみんなからユウレイといわれていた。名前を略しているのもあるけれど、色が白くてやせていて、ぴたりってかんじ。ちょっと変わった子だ。今だって、足音もたてないで近づいてきた。

結城レイが、みんなとわいわいさわいしているのを見たことがない。それに、そんな風に呼ばれても、ぜんぜん気にしてないらしいのが亜紀はふしぎだった。

そのレイが、ちょうど窓から差し込んできた光の中にいて、まぶしいくらいに笑っている。